

## クィアな創造の美学 —— ワイルド批評・思想における逸脱性

金田 仁秀

ワイルドの批評とって思い起こされるのは、一般的には *Intentions* に収められた論考、特に“The Decay of Lying”と“The Critic as Artist”である。しかしながら、アメリカでの講演、文学や劇についての批評、女性の服装やモデルについての考察から、個人主義やジャーナリズムについての議論まで、ワイルドが批評の対象とした題材は多岐に渡る。また、時期も幅広く、時によってその数は変わるが、生涯ワイルドは批評に携わっていたと言っていいただろう。したがって、ワイルドの批評に面すると、それをどう扱い解釈したらいいのかという困難性が常に付きまとう。その解決策として、オックスフォード時代、講演時代、*Woman's World* 編集者時代、風習喜劇時代、出獄後など、時系列に区切って論じることが考えられ、また実際になされることがしばしばある。それでもやはりワイルドの批評を扱うのが困難であるのは、主題、媒体、時代などが多層に交錯し、その時々に関心やコンテキストに応じて、内容も形式も変化するからである。このように考えると、ワイルド程、ある時期や作品に限定して論じた方が無難な作家はいないと言っていいかもかもしれない。この時事性、歴史性が非常に強いために、ワイルドの批評や思想は、発展という物語ではなく、その時々で自在に変化するものとして、すなわち、ストレートな連続性ではなくクィアな個別性として浮かび上がる。

こうした事実を心に留めながら、本論では、二つの対照的に思われるワイルドの批評を取り上げ、矛盾や逸脱を産み出すものとして、時事性やコンテキストといったある種、外的な要素と、スタイルや思想自体に起因す

る内的な問題とを探ってみたい。そして、体系的な解釈を拒みながら脱構築していくワイルド批評の逸脱性と創造の美学を垣間見てみたい。

\*

芸術の自律性を唱える「芸術のための芸術」は、Walter PaterやWilliam Morrisの影響を受けたワイルドが、最初に傾倒した思想であり運動であることは周知の事実だ。ワイルドが持っていた実質的な理念や思想はともかく、それを体現するような行為が社会に衝撃を与えたことは、*Punch*に揶揄されたり、GilbertとSullivanのオペラ*Patience*の広告塔としてのアメリカ講演旅行の契機となったことから明らかだ。こうした中、ワイルドの時事性が現れる一つの例が服装に関する議論である。

ワイルドの活躍当初から美は服装と結びついていたので、それが理論となって語られたとしても驚くに値しないだろう。実際、アメリカでの講演、“House Decoration”において、ワイルドは服装についての見解を挿入している。この時、ワイルドが参照したのがH. R. Haweis夫人の*The Art of Dress*であったことは、彼がこの本をニューヨークに送るよう依頼していることから明らかである。ワイルドの服装への関心はさらに増したようで、1884年後半になると、それは付随的な要素ではなく中心主題となり、“The Philosophy of Dress”と題する講演として結実する。この講演を創作した背景には、新しい講演が必要であったという事情があることは確かであるが、内容についていえばJohn Cooperが指摘しているように、同じ年に開催された国際健康展覧会(International Health Exhibition)に触発されたと考えられる。

この展覧会は、ヴィクトリア女王の庇護と皇太子監督の下に1884年5月8日から10月30日までの約6か月間に渡って開催された。そこでは、食べ物、衣服、住居、学校、工場などが展示の対象とされたが、基本的な理念はその名称が示すように、健康的な生活環境の促進であった。したがってそこには、衛生的な食べ物や住環境なども含まれ、教育を通した啓蒙にも焦点が当てられている。服装についてのパンフレットの一節では、次のように記述されている。

Fortunately there need be nothing unsightly in healthful attire, and one of

the primary objects of this Exhibition will be an attempt to show that a costume may be at the same time hygienic and graceful; indeed it is only a vitiated taste nourished on an unnatural craving for notoriety, and vulgar ostentation, that gives birth to the extravagances which ultimately become the Fashion. . . . The vagaries of the aesthetes are even more ridiculous than the brainless absurdities of fashion. (31)

ワイルドと深い親交があった William Godwin は、全体の委員会のメンバーであると同時に、服装についての委員会のメンバーであった。彼は“Dress, and its Relation to Health and Climate”というハンドブックも寄稿している。この本について、ワイルドは1884年10月から11月に彼の意見を発端に *Pall Mall Gazette* 紙上で繰り広げられた服装議論の一つで、素晴らしいハンドブックと称えている<sup>1</sup>。また、自分の主張について Godwin も同意してくれるだろうと述べたり、彼に理想的な服装の絵を書いてもらっていることなどを考えると、ワイルドが Godwin の思想に信頼を置いていたことは間違いない。Godwin のハンドブックでは、建築同様、服装は芸術であり科学だと述べられ、美と健康の必要性が説かれている。そして、挿絵を交えて古代からの服装の歴史的な変遷が詳細に語られる中、17世紀の服が称賛されている。これに呼応するように、ワイルドも17世紀の服装が良いものだと主張する。また素材については、Godwin はウールが最も優れていると述べているが、この点もワイルドは同様である。さらに、コルセットやきつい服装の否定や建築と衣服の法則の同一性という点においても、二人の考えは一致する。

Haweis 夫人の *The Art of Dress* や *The Art of Beauty* にも、ワイルドの服装についての考えと同じものを見ることができる。前者は1879年に、後者は1878年に出版されているので、展覧会とは6年ほどの開きがあるが、ワイルドが1882年に取り寄せていることを考えると、時間的にはそれほど隔たったものと考えなくてもいいだろう。Haweis 夫人は、これらの本でコルセットは暴君だと述べ、不自然な内蔵の状況を表す挿絵を用いながら、健康を損なうものとしてそれを糾弾している。また *The Art of Dress* においては、服装は単に体を守るものではなく芸術作品であるべきであり、表現

するものだと主張し、次の3つの規則を掲げている。

1. That it shall not contradict the natural lines of the body.
2. That the proportions of dress shall obey the proportions of the body.
3. That the dress shall reasonably express the character of the wearer. (32)

こうした規則の根本にあったのは、自然なものから生まれる美である。それは有用性や快適性、健全性と結びつく。この点で彼女の考えは、Godwinや展覧会の趣旨と同じである。

さて、唯美主義者ワイルドが、服装を美的な体現として捉えることには、何の疑問も生じないだろう。他方で、先に引用したパンフレットの後半にある唯美主義者への批判は、ヒマワリのボタンホールに象徴される服装を通して、自己宣伝するワイルドのような人物が想定されているように思われる。また、*Intentions*における反自然の思想や『ドリアングレイの肖像』などに窺える退廃的な言動に照らし合わせると、ワイルドと健康や有用性は似ても似つかないものである。しかしながら、*Pall Mall Gazette* 紙上での議論や、1885年4月19日 *New York Daily Tribune* に掲載された講演原稿“*The Philosophy of Dress*”においては、このまったく相応しくない健全性を称揚する主張がなされている。

これらにおいては、美は有機的である、服装の美はそれが生み出す美しさにかかっている、芸術には法則があり、永遠だといった美学が語られるが、その美学は明確に健康や有用性と結びついている。例えば、ワイルドは服装は肩から掛けるべきだという主張を繰り返す行いが、その理由は、そうすることで人工的な支えが不要になるからである。自然は人に腰から何かを吊るすような場を与えておらず、きついコルセットによって、人工的なでっぱりが必要になる。肩から掛ければコルセットは不要になり、呼吸も動きも自由になる。より健康であるからより美しいのだというのがワイルドの論理だ。

もちろん、身体自体が最も美的なものだと捉えられるならば、先に挙げたHaweis夫人の第一の規則、身体 of 自然な線に反しないことは、当然導き出される論理である。実際、ワイルドも、身体が美しいようにそれを正

しく覆う衣服もその構成や線において美しくあるべきだと述べている。しかし、健康や有用性となると、退廃的なワイルドのイメージとは異なると言わざるを得ないだろう。無用であることを芸術や美と結びつけるワイルドとは正反対に、服装におけるこの時期の一連の主張では、醜悪さとは無用さであり、また実用的ではないことの印だと述べられる。ワイルドの思想が健全なものと捉えられたことは、“The Philosophy of Dress”が掲載された *New York Daily Tribune* の記事からも窺える。そこでは、“when they [American women] learn to reverence the beauty which proceeds in dignified simplicity from the hands of Nature herself, there will surely be a revolt against the monstrosities of millinery and dressmaking.”と述べられ、ワイルドの論に横たわる原理が称賛されるのだ<sup>2</sup>。

衣服改革という運動自体、新しいものであったが、こうした歴史的コンテクストに置くことで、健全性を唱道するワイルドの姿、そして彼の批評スタイルがより明確になる。それは、時事的な事柄に反応して創造する、その時々で変わりゆくワイルドだ。こうした姿勢が、生涯のような長いスパンで、彼の批評に一貫性を見出すことを困難にする要因の一つとなっているのだ。

では、ワイルドの多様性と困難性を考察するために、1885年頃の健全性と結びつくワイルドと服装議論から離れ、それとは対照をなすように思える *Intentions* の論考から浮かび上がるワイルドの批評、思想に目を向けてみたい。その際、取り上げたいのは、タイトルからして不健全性を示唆する“Pen, Pencil, and Poison”（以後“Pen”と省略）である。服装議論同様、歴史的コンテクストを追いながら、ここでは特に改訂に注目し、より内在的な逸脱性や矛盾の問題も考えてみたい。

新聞、雑誌への投稿がそのまま掲載されたのとは異なり、*Intentions* に収められた4つの論考は、すべて一度雑誌に掲載された後に本として纏められている。“The Decay of Lying”や“The Critic as Artist”と比べると批評されることが少ない“Pen”も、元々は1889年1月に *Fortnightly Review* に掲載されたものである。内容としてはウェインライトの評伝を中心としながら、そこに芸術や犯罪と個性の問題などを散りばめたものとなっている。犯罪、しかも毒殺を芸術の観点から見るとなると、服装議論での健全

性とは異なり、現代の読者にはいかにもワイルドらしい考えと映る。それは、“The Critic as Artist”や*The Picture of Dorian Gray*の序文で唱えられる芸術と道徳の領域の断絶を思い起こさせる。しかしながら、出版当時の書評には、反社会性や不健全性を指摘するようなものはほとんどない。むしろ、ワイルドに沿ってウェインライトを紹介しながら、面白い評伝として好意的に受け入れる記事がほとんどである。例えば、*The Aberdeen Press and Journal*は、次のようにこのエッセイを称賛する。“Mr Wilde has made an honest attempt to do justice to all sides of a very perplexing character. He very justly contends that the fact that the man was a poisoner is nothing against his prose” (7)。こうした反応は、既に Thomas De Quincey が “On Murder Considered as One of the Fine Arts” において、殺人を芸術として見る視点を提供していたという背景とも関係しているだろう。De Quincey のエッセイは、“First Paper”が1827年、“Second Paper”が1839年、“Postscript”が1854年に出版されているので、時間的には隔たりがあるが、これが広く知れ渡っていたことは確かだ。実際、*Punch*はDe Quinceyのこのエッセイに触れながら、“Pen”を“not too De Quincey-ish, but just De Quincey-ish enough” (12) であると記している。しかしながら、De Quinceyは本体のレクチャーの前に導入部を入れることで、殺人を芸術と見なす殺人鑑定協会 (Society of Connoisseurs in Murder) がパロディの対象であることを明らかにしている。他方で、ワイルドの場合、Lawrence Dansonなどが指摘するようにウェインライトとその殺人の扱いは曖昧である。

歴史的なコンテキストや改訂に注目しながら、こうした“Pen”の問題を考察していきたい。同じく偽造者であった Thomas Chatterton とは異なり、Charles Dickens や Edward Bulwer-Lytton の作品のモデルになっても、19世紀後半にウェインライトにそれほどの人気があったわけではない。しかしながら、彼がまったく忘れ去られた存在ではなかったことは、“Pen”初出の一年後にあたる1890年に出版された*The Criminal*において、Havelock Ellis が彼を “instinctive criminal” の最も発展したものと指摘していることから窺える。ワイルドが“Pen”を執筆するにあたって、正確にいつウェインライトに目を付けたのかは明白ではない。しかし、少なくとも彼に唯美主義的なものを見出したことは、ワイルドがエッセイ中に引用し

ているウェインライトの言葉から明らかである。実際、当時の幾つかの書評でも彼は唯美主義者の先駆と指摘されている。

“Pen”におけるウェインライトについての参照元は、ワイルド自身も言及しているように、1880年に出版されたW. Carew Hazlitt編集の*Essays and Criticisms*である。ウェインライトからの長い文章はこの本からほぼ正確に引用されているし、“Pen”の多くを占めるウェインライトの伝記についても、Hazlittがこの本の最初に付けたものに依拠しており、いわゆる孫引きも多くなされている。別の参照元としては、Algernon Charles Swinburneの*William Blake*とDe Quinceyの“Charles Lamb”が指摘されているが、後者は特に注目に値する。というのも、De Quinceyの記述はオリジナルの“Pen”には一切なく、*Intentions*に収める際の改訂で付け加えられているからだ。したがって、ワイルドはオリジナルと改訂の間にそれを読んだか、或いは読み直し、このエッセイにとって有益と思われる箇所を加えたと考えていだろう。その中で重要な加筆の一つと考えられるのが、ウェインライトが一人で毒殺を行ったというくだりである。Hazlittの伝記では、妻と自分は共謀者であるとウェインライトは認めているとされている。これに対してDe Quinceyでは、毒によって生じる痙攣に妻が気付き報告するのを恐れて、ウェインライトは彼女を散歩に連れ出す口実を考えたとされている(250)。改訂においてワイルドは後者を採用し、次のように加筆している。“De Quincey says that Mrs. Wainewright was not really privy to the murder. Let us hope that she was not. Sin should be solitary, and have no accomplices” (81)。ワイルドはこれによって、犯罪と個性の結びつきを強めているのだ。

“Pen”は、全体としてはウェインライトを題材とした、犯罪と個性、教養、芸術を巡る議論と言える。中でも“This young dandy sought to be somebody, rather than to do something. He recognised that Life itself is an art. . . .” (63)という一節は、“The Critic as Artist”で唱えられる“the contemplative life”、すなわち“the life that has for its aim not *doing* but *being*, and not *being* merely, but *becoming*” (175-76)と呼応し、人生の芸術化という主題、殺人という行為を芸術的創造、表現とする考えを示唆する。これはまた、既に見た服装への関心はもとより、ワイルドの他のエッセイで扱われる表層的な美や仮面といった事柄とも関係するように思える。こうした間テクスト的な

解釈への誘惑は、偽名についての一節の改訂によっても強められている。*Fortnightly Review*版においては、単に偽名を使ったと記述していた一節を、ワイルドは次のように書き換えているのだ。

... and under a series of fanciful pseudonyms he began to contribute to the literature of his day. *Janus Weathercock*, *Egomot Bonmot*, and *Van Vinkvooms*, were some of the grotesque masks under which he chose to hide his seriousness, or to reveal his levity. A mask tells us more than a face. These disguises intensified his personality. (61-62)

仮面の方が真実であり、また仮面によって個性が増すという主張は、特に“The Truth of Masks”を思い起こさせ、多様に読まれる表層と個性の多様性というワイルドの思想を示唆する。ここで見られるのは、常に創造され、多様化することに快楽を見出すワイルドであり、深層や絶対的な真実への抵抗である。したがって、ここにGiles Whiteleyが指摘するような、Deluze的な強度の過程としての差異化というシミュラクルの哲学を見出すことも可能であろう。そしてそれは、Moe Meyerが論じるように、“camp”として政治的な力を持つものと言えるだろう。

しかしながら、“Pen”における個性の議論は、それほど簡単に処理できるものではない。というのも、多様な表層という観点から解釈することができないような個性の扱いはあるからだ。その例が“They [his crimes] gave a strong personality to his style. . .”や“One can fancy an intense personality being created out of sin.” (88)といった一節である。ここでの個性は、明らかにヒューマニズム的な主体が想定されている。つまり、ウェインライトが犯罪を犯したことに起因する内的な変化が、彼の芸術に影響を与えて特徴あるものにしたという、いたって平凡な個性の概念である。Dansonはこれを数の可能性から見ているが(94-95)、ウェインライトのスタイルの発展についての議論の中での言葉であることを考えると、ここに見出されるのは、変化するものであるとしても、根本的には同一性に基づく、安定した主体だ。

したがって、改訂でより明確化されている構築主義的で多様な主体、強



度だけが問題となる不在の主体としての個性がある一方で、それが永遠ではないとしても、強化され得る実体を備えた主体に根差した個性という揺れが“Pen”の内部に存在することになる。Terry Eagleton が“he values the non-identical, but is committed to a notion of individualism which depends on self-identity.” (336) と述べる両義性が“Pen”にもあるのだ。こうした状況は、*Intentions* の他のエッセイにも見られるものであり、ワイルドの批評や思想をストレートに解釈することを阻む要因の一つとなっている。先の服装に関する議論を振り返ると、そこでは表層が身体に先行し創造するという、構築主義的概念の萌芽を見出す誘惑にかられる。しかし、そこでの服装は、自然と一体化した安定したものであった。そうした差異を、例えば“*The Truth of Masks*”の最後の一節だけを頼りに無視する読みは、ワイルド批評、思想の時事性や逸脱性に目を向けないロゴセントリックなものと言わざるを得ないだろう。

ワイルドの主体についての問題を、身体と精神と同性愛の観点から考えてみたい。Kevin Kopelson が指摘するように、19世紀後半、同性愛が同性愛行為と同等ではないとするときに使えた言説の一つが、脱性化 (desexualize) されたものとしてのプラトニズムであった (19)。Michelangelo や William Shakespeare に言及しながら、同性愛を弁護した有名なワイルド裁判での言葉が示すように、実生活ではどうであったにしろ、ワイルドが同性愛をプラトニズムの観点から見、審美的な観点で捉えていたことは確かだ。そこで中心となるのは、行為ではなく、超越的な美としての精神である。これを“*The Critic as Artist*”の中に見出すならば、ワイルドが、行為を制約された盲目的な反復として退けていることと結びつく。そして、それを超える手段が想像力に満ちた創造性であり、批評精神、或いは観照とされる。そこから生み出される警句が、“When man acts he is a puppet. When he describes he is a poet.” (131) というものだ。

しかしながら、通常、創造とは行為である。もちろん、これは Pater の *Appreciations* での言い回しと同様、手段と目的の一致の言い換えと解釈することもできる<sup>3</sup>。しかし、“*The Critic as Artist*”での議論の流れからすると、この行為が意味するのは反復的で制限された動作である。では、夜食を食べに行ったり、コヴェント・ガーデンへ誘うという快樂的行為はどう解釈

できるのか。もちろん、最後の眺めるという行為は観照に近接するようにも思える。しかし、考えに飽きたというギルバートのまさに最後の言葉はどう捉えたらいいのか。これらを皮相的で無頓着な矛盾と考えることもできるし、嘲笑的に自らを脱構築していく、逸脱の行為と見なすこともできる。これ自体が会話を通じた創造的なテキストであるために、ここに一貫性を見出すのは非常に困難になる。重要な語句の指示対象も多様化し、セルフ・パロディのようなテキスト行為がそれを取り巻くワイルド批評のこうしたスタイルは、ストレートな解釈を寄せ付けない。

ワイルドがこのように説く創造性は、主体に関する安定した地と図柄という語りに揺れをもたらす。表現としての身体は、美の創造の場として重視されればされるほど、それらは独立して、多様化する可能性がある。そして実際、“Pen”の個性論や仮面論が部分的に示しているのは、そうした表層だ。それは、嘘や偽造の優位、自然と芸術の転倒、それ自身が芸術となる批評、形式の優位など、ワイルドの一連の思想が示唆するものであり、制限に抵抗し、浮遊し、引き延ばされ、多様に読まれていく。

Karl Heinrich Ulrichs、Edward Carpenter、John Addington Symondsといったワイルドに先行する、或いは同時代の同性愛解放運動の主導者たちは、同性愛者にとって同性愛は自然であり、その意味で健全であると主張することで、抑圧に抗議の声を挙げた。これに対して、*Intentions*から浮かび上がるワイルドは、反自然とされた同性愛を自然化するのではなく、自然を遅れたもの、制約されたものとみなし、自然からの逸脱に力を見出す。この戦略が自由な表層の創造と結びつくことは容易に頷けるだろう。しかしながら、そうした表層は身体表現として行為と近接するため、脱性化された精神としての同性愛に揺れを引き起こす。精神としての審美的な同性愛は、同じく審美的な表層的身体に侵食され、その超越性が危機に晒されるのだ。こうした身体と精神の問題を、ワイルドは芸術と創造性によって一纏めにしようとするが、それが引き起こすのは問題の解決ではなく、解釈のアポリアである。ワイルドのテキストでは、身体と精神は、時には二項対立となり、時には重なり、時にはどちらかが先行する。そうした揺れを内包しながら、創造自体が批評精神であり、芸術であり、また多様であること、逸脱していくことが重視されるとすれば、それは危険な代補に魅

せられる快樂の美学である。そしてここにワイルドの同性愛の言説を見出すならば、それは普遍性と特異性を、同一性と差異を彷徨い続けるような、クリアな戯れと言えよう。

\*

服装議論を健康と結びつける健全なワイルドと、*Intentions*などに見られる不健全なワイルドから浮かび上がるのは、歴史的コンテクストに応じながら行為遂行的に多様化し、逸脱性を誇示する彼の批評、思想である。この点で*Intentions*収録時の“A Study of Green”という“Pen”への副題の加筆は興味深い。この緑が何を指すのか。*The Green Carnation*をはじめとしたワイルドと緑の関係を思い浮かべる読者の場合、同性愛への仄めかしと捉えるかもしれない。しかしながら、副題であることを考えると、まずはウェインライト自身についての言及と解釈すべきであろう。そうすると、彼が緑を好んだという“Pen”おける一節が思い出される。

He had that curious love of green, which in individuals, is always the sign of a subtle artistic temperament, and in nations is said to denote a laxity, if not a decadence of morals. (64)

ワイルド特有の“always”を使ったこの誇張的な一節は強い印象を与えたようで、*Fortnightly Review*に掲載された際、幾つかの書評ではここが引用されている。しかし、“Pen”におけるウェインライトの伝記的な要素はHazlittに依拠しているにも拘わらず、緑が芸術気質を表すという発言はもとより、ウェインライトが緑を好んだという記述もない。自然を好んだという点での緑はある。しかし、Hazlittの伝記にも、ウェインライト自身のエッセイにも、特に緑との結びつきは記されていないのだ。となると、この加筆はワイルドの自由な創造と考えられ、読者はその意味の解読により惹きつけられる。

Richard Ellmannによる伝記を頼りに、ワイルドが住んだタイトストリートの居間の一つが緑の壁と天井でできていたことを思い起こすならば、これはウェインライトにワイルドが自らを重ねたものと解釈できるかもしれない<sup>4</sup>。しかし、色の感覚の重要性を唱えながらも、ワイルドがさまざま

な作品や会話でさまざまな色に言及していることを考えると、それほど単純に解釈できるのか疑わしい。実際、ワイルドは“The Philosophy of Dress”において、“I should like to state once for all that there is no such thing as a specially artistic color.”と述べるだけでなく、“one should have no more preference for one color over its neighbor.”とさえ主張する。これは1885年頃のワイルドの考えに過ぎないのではという疑問に対しては、服装の色に関するものではあるものの、*Intentions* 出版と同年の1891年に *Daily Telegraph* に宛てた手紙の中の主張、“Freedom in such selection of colour is a necessary condition of variety and individualism. . . .”を挙げることができるだろう<sup>5</sup>。

緑のカーネーションを友人たちに付けさせ、自らも付けて *Lady Windermere's Fan* の初演に臨んだことは広く知られているが、R. S. Hichensがワイルドとダグラスを揶揄した小説のタイトルとして *The Green Carnation* を選び、また同性愛の秘密のコードであったとされていることから、この副題の付与は、ワイルドによる同性愛と秘密の戯れという解釈を呼び起こす<sup>6</sup>。しかし、それは後のテキスト作用に多くを依存している。こうしたことは、特に同性愛の秘密を探る試みでしばしば起こる。例えば、それはEllisの緑の扱いにも見受けられる。彼は1897年初版の *Sexual Inversion* において、性的倒錯者と緑への好みを結びつけているが、それが1901年の版ではさらに加筆されていく<sup>7</sup>。これが示唆するのは、両者の関係を確立した上で同性愛を意味づけていく、アナクロニスティックな読み込みだ。

ワイルドは *The Green Carnation* が自分の作品だと考えられたのを否定した際、芸術作品として素晴らしいその花を自分が発明したのだと *Pall Mall Gazette* 紙への投書で述べている<sup>8</sup>。一方、その2年以上前、*Lady Windermere's Fan* のエピソードの後、*Pall Mall Gazette* 紙は、それはフランスで作られているとし、美しくないがゆえに流行らないだろうと述べている。そして、さらにこの花を“an unnatural production”と述べている<sup>9</sup>。しかし、これらの一連のテキストから、不自然さを芸術に移し替えるワイルドとの対応を見出し、反自然、反異性愛として、“Pen”における加筆を同性愛と結びつけるのは注意が必要だろう。同性愛という意味が常に付随す

る「ワイルド」というテキストは、否応なくそのような解釈を誘う。しかし、服装の議論や“Pen”の改訂などが明らかにするのは、歴史的な場で多様化するワイルドの創造であり、それによって生じる矛盾や逸脱である。こうした作用を踏まえずに同性愛者ワイルドという神話を再生産することは、彼のテキストがメタ的に示す解釈と創造性の問題に目を向けないことになる。実際のところ、*Lady Windermere's Fan*に纏わるエピソードについてのEllmannの伝記的情報が正しいとしたら、何を意味するのかというRobertsonの質問に対するワイルドの返答は、“Nothing whatever, but that is just what nobody will guess.” (345)であったのだから。

このようにみると、“A Study of Green”という副題の加筆は、ワイルド批評、思想を象徴する行為と言えるだろう。それは何かを意味するように誘惑しながら、何であるのかを隠すだけでなく、何かが隠されているという事実さえも解釈に晒すもの。いわば解釈の差延に引き込む遂行的な行為である。ワイルドの批評や思想が描き出すのは、それ自身がクィアな創造として戯れる、逸脱のテキストだ。そうした行為と対峙しながら、いかに歴史性の中で読み解くのか。ここに、ワイルドの批評や思想を解釈することの難しさがある。そしてここにまた、彼が提唱する創造的批評の危険な快楽があるのだ。

\*本稿は日本ワイルド協会第42回大会シンポジウム「オスカー・ワイルドの批評と歴史性——『解釈』をめぐる」(2017年12月2日、慶應義塾大学三田キャンパス)での発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

- 1 “Mr. Oscar Wilde On Woman’s Dress,” *Pall Mall Gazette*, 14 Oct. 1884, 6. *Pall Mall Gazette*紙に掲載されたもう一つの服装議論としては、1884年11月11日掲載の“More Radical Ideas upon Dress Reform”がある。これらと関連する記事については、Cooperを参照。
- 2 “What is Dress for?” 6.
- 3 Paterは次のように述べている。“That the end of life is not action but contemplation—being as distinct from doing—a certain disposition of the mind: is,

- in some shape or other, the principle of all the higher morality. . . . To treat life in the spirit of art, is to make life a thing in which means and ends are identified” (61-62).
- 4 Josephine M. Guyは“Commentary”において、ワイルドではなくPaterとの関係を指摘している(420)。
- 5 “Fashion in Dress,” *Daily Telegraph*, 3 Feb. 1891, 5.
- 6 これまで多くの批評家がこの結びつきに触れているが、Karl Becksonは“evidence remains obscure”(122)と指摘している。また*The Green Carnation*も、ホモエロティックな作品であることは確かだが、少なくとも筋の上では、失敗するものの異性愛に即していることを認識する必要がある。
- 7 初版では“It has also been remarked that inverts exhibit a preference for green garments.”(125-26)と述べ、ローマとパリの例に簡単に触れているだけだが、次の版では緑への疑いようなない好みが自分の事例の幾つかでは見られ、それらは無意識に起きていると論じ(177)、性倒錯は生まれつきであるという主張に繋げている。
- 8 *Pall Mall Gazette*, 2 Oct. 1894, 3.
- 9 “The Shops and Fashion,” *Pall Mall Gazette*, 25 Feb. 1892, 1.

引用文献

- Aberdeen Press and Journal* 14 Jan. 1889.
- Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia*. New York: AMS Press, 1998.
- Carpenter, Edward. *The Intermediate Sex: A Study of Some Transitional Types of Men and Women*. London: Swan Sonnenschein, 1908.
- Cooper, John. *Oscar Wilde on Dress: Including for the First Time—The Philosophy of Dress—by Oscar Wilde*. Electronic ed. Philadelphia: CSM Press, 2013.
- Danson, Lawrence. *Wilde’s Intentions: The Artist in his Criticism*. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- De Quincey, Thomas. “Charles Lamb.” *The Collected Writings of Thomas De Quincey*. Vol. V. Ed. David Masson. London: A & C Black, 1897. 215-58.
- . “On Murder Considered as One of the Fine Arts.” *The Collected Writings of Thomas De Quincey*. Vol. XIII. Ed. David Masson. Edinburgh: A & C Black, 1890. 9-124.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995.
- Ellis, Havelock. *The Criminal*. London: Walter Scott, 1890.
- . *Studies in the Psychology of Sex: Sexual Inversion*. Philadelphia: F. A. Davis Company, 1901.
- Ellis, Havelock, and John Addington Symonds. *Sexual Inversion*. London: Wilson and Macmillan, 1897.

- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Penguin Books, 1988.
- Godwin, E. W. "Dress, and its Relation to Health and Climate." *The Health Exhibition Literature. Volume X. General Hygiene. Handbooks*. London: William Clowes and Sons, 1884. 193-278.
- Guy, Josephine M. "Commentary." *The Complete Works of Oscar Wilde. Vol. 4 Criticism*. Ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007. 269-584.
- Haweis, H. R. *The Art of Beauty*. 2nd ed. London: Chatto & Windus, 1883.
- . *The Art of Dress*. London: Chatto & Windus, 1879.
- Hichens, R. S. *The Green Carnation*. Amsterdam: Fredonia Books, 2005.
- International Health Exhibition 1884: Official Catalogue*. 2nd ed. London: William Clowes and Sons, 1884.
- Kopelson, Kevin. *Love's Litany: The Writing of Modern Homoerotics*. Stanford: Stanford UP, 1994.
- Meyer, Moe. "Reclaiming the Discourse of Camp." *The Politics and Poetics of Camp*. Ed. Moe Meyer. London & NY: Routledge, 1994. 1-22.
- Pater, Walter. *Appreciations: With an Essay on Style*. London: Macmillan, 1889.
- Punch, or The London Charivari* 5 Jan. 1889.
- "The Shops and the Fashions." *Pall Mall Gazette* 25 Feb. 1892: 1.
- Swinburne, Algernon Charles. *William Blake: A Critical Essay*. London: John Camden Hotten, 1868.
- Symonds, John Addington. *A Problem in Modern Ethics*. London: n.p., 1896.
- Ulrichs, Karl Heinrich. *The Riddle of "Man-Manly" Love: The Pioneering Work on Male Homosexuality*. Trans. Michael A. Lombardi-Nash. 2 vols. New York: Prometheus Books, 1994.
- Wainwright, Thomas Griffiths. *Essays and Criticisms*. Ed. W. Carew Hazlitt. London: Reeves & Turner, 1880.
- "What is Dress for?" *New-York Daily Tribune* 19 Apr. 1885: 6.
- Whiteley, Giles. *Oscar Wilde and the Simulacrum: The Truth of Masks*. London: Legenda, 2015.
- Wilde, Oscar. "The Critic as Artist." *Intentions*. 4th ed. London: Methuen, 1909. 93-217.
- . "More Radical Ideas upon Dress Reform." *Pall Mall Gazette* 11 Nov. 1884: 11-12.
- . "Mr. Oscar Wilde on Woman's Dress." *Pall Mall Gazette* 14 Oct. 1884: 6.
- . "Pen, Pencil, and Poison: A Study in Green." *Intentions*. 4th ed. London: Methuen, 1909. 55-91.
- . "Pen, Pencil, and Poison: A Study." *Fortnightly Review* Jan. 1884: 41-54.
- . "The Philosophy of Dress." *New-York Daily Tribune* 19 Apr. 1885: 9.
- . "The Truth of Masks." *Intentions*. 4th ed. London: Methuen, 1909. 219-63.